

『逸脱の唱声 歌謡の精神史』

小池 淳一

二 境界と歌謡

— 内容の縮約と若干のコメント (一)

一 本書の魅力

歌謡史研究において、境界や宴、呪的言語を主題として新しい領域を開拓する本書は、口承文芸研究にも多大な示唆を与えてくれる。全体が四章に分かれ、序章と終章を含めると十五節にわたつての論述が展開していく。一九八八年以降の著者の歌謡に関する論考の集成であり、王城、参詣、地名、通りゃんせ、一つ松、立待、小唄、宴、酒盛、鼻歌、はやしことば、あいづちといったキーワードを挙げれば、本書が民俗的な世界を知悉しながら、歌の歴史という深遠な世界へ測鉛をおろした著作であることがうかがえるだろう。

本書の著者は『柳田国男 物語作者の肖像』(二〇一〇年、梟社) によって長年の柳田研究の集成を果たしたが、それから僅かな期間のうちにもう一つの研究の柱である歌謡の研究にも区切りをつけた。本書は序章において「ウタとは何か。人はなぜウタをうたうのか。」(八頁)と問いかけ、終章でウタ表現において聞き手は決して必要不可欠な存在ではなく、聞き手の登場を次なる課題として挙げる(三四八頁)。とすると本書は歌謡の始原から聞き手以前までを取り扱いつつながら、その特質を探るものとして位置づけることができる。そうした歌謡の基層にある性質が、文化史と鋭く切り結びながら解明されていく点に本書の魅力がある。

まず、本書の構成と内容を紹介しながら、評者なりの読み取り、コメントを記していきたい。先にも述べたように、序章「うた」のある風景」では、ウタとは何か。人はなぜウタをうたうのか、と問いかける(八頁)。あるいは人を眼に見えない力で歌へと駆り立てていく磁力のごとき力の働く場、「歌の磁場」という視点が提出される(二四頁)。そして歌とは、眼に見えない何か(「たま」だと言う)に向かって発せられた表現と定位され(三〇頁)、それが以下、つき詰められていくことになる。

第一章「彼岸への逸出—結果と道行(二)」は四篇からなる。「王城」の内と外—今様・霊験所歌に見る空間意識—は社寺参詣の道行の歌謡において、その表現が参詣や巡礼という体験のなかから生み出されるものであると主張する。そしてそ

の反芻的体験、言語的追体験が歌謡となつてゐるのだという（四八―四九頁）。「熊野参詣の歌謡―結界と道行―」は前節の認識を熊野という古代以来の代表的な霊地において確認する。それによつて、例えば「そこであつたわれる地名の一つ一つは、本

的に援用して、歌謡の持つていたであろう一種の力のようなものを復元してみせる。歌謡を一度、広い世界に解き放つことで、その特質を見出そうとする試みであり、それは説得力を持つて展開されているといふことができよう。

の日本文化誌」が置かれている。ここでは「待つ」という行為が、尊いもの、大切なものの顕現、来臨を強く念じ、全身全霊でもつてその実現を乞ひ願う強い情動に裏付けられた、きわめて主導的で積極的な行為であつた（一九四頁）とされている。

来、その地が持つてゐる結界的性格を具体的に担つていたはずである」（八一頁）といつた認識に達し、次の「地名をうたう―境界に響く歌こえ―」へと論が伸びていく。ここでは道を尋ねる歌謡表現、それと道行さらに結界との関係、国魂と地名との関わりを経て、土地の名を改めて表に顯す表現の様式としてそれを位置づけてゐる（一〇四―一〇六頁）。「道祖神と通りゃんせ」は境界に祀られる道祖神とそれにまつわる歌謡や遊びを取り上げて、通りゃんせという遊びが前代日本人特有の空間、境界に対する意識を背景として生み出されていると論じてゐる（一一六頁）。

第二章「境界の言語表現―結界と道行」は、前章で扱つた境界の表象に論を進める。最初の二篇で一つ松を論じ、三篇で「立ち待つ」行為を扱う。「尾上」といふ場所―一つ松考序説（一）―では、尾上に立つ一本松をめぐる歌謡を取り上げ、「木に衣を掛ける―一つ松考序説（二）―ではそうした松に衣を掛ける行為を対象にしている。ここでは「尾」「尾上」と呼ばれる場所の包有する呪性（一三四頁）が見出され、そこにある木に衣をかけることは、境に立つ神を標し木であることを顕わに示す行為であると看破する（一六五頁）。

この章では「立つ」行為という面に着目し、そうした行為、しぐさ、場所に与えられてきた表現の深層に迫る試みが展開されている。人間ばかりではなく、木、そして境界の場所が持つ意味が行為と表現に溶かし込まれてきたことを見抜いた著者の慧眼を称えたい。前章で示された歌謡を孤立させない方法で境界における歌謡表現がより具体的なイメージで主張されているといえる。

ここでの著者は歌謡を孤立させずに、同時代の同じ土地、空間をめぐる史資料あるいは類似の空間に対する民俗資料を積極

的に援用して、歌謡の持つていたであろう一種の力のようなものを復元してみせる。歌謡を一度、広い世界に解き放つことで、その特質を見出そうとする試みであり、それは説得力を持つて展開されているといふことができよう。

第三章「逸脱の唱声―室町びとの歌こえ」は、中世の歌謡の場を鮮やかな筆致で再現し、その特徴を論じる三篇からなる。

三 歌謡の場の歴史から

― 内容の縮約と若干のコメント（二）

「閑吟集―室町小歌への誘い」では、中世の酒宴の場が小歌をはぐくみ、育てたという指摘を行い(二〇三頁)、その場を「逸脱」の唱声―室町小歌の場と表現」においてさらに追究していく。ここでは宴という場の持つ性格が、その社会的な位置づけ、酒によってもたらされる効果に即して論じられる。酒による逸脱、その共同性に誘うものとして歌があるという(二二六頁)。本書全体の表題にも含められた「逸脱」とは、共同のものであり、狂や情を人びとが、無意識のうちに、一定の手続きのもと、構築してきたものであるということがここに至って理解されよう。著者のこたわる歌謡はそうした「逸脱」を作り、彩る言語表現なのであった。そしてそうした認識は次の「酒盛考―宴の中世的形態と室町小歌」で角度を変えて論じられていく。

ここでは柳田國男の「酒の飲みやうの変遷」や『明治大正史世相篇』の「酒」に対する再検討を経て、酒盛という語の内容と中世に至ってそれが浮上してくることを確認し、酒盛という場が俗世間の身分や地

位から解き放たれた超俗の、新しい空間であることを、一貴族の日記に記された「御斟酌停止」という文言から読み取ってみせる(二四五頁)。そして「酒盛」に宴における中世を見出すのである(二五二頁)。

本章は口承文芸研究そのものから見るといささか縁遠い歴史的世界の考察のようには思われるかもしれない。しかし、著者の方法やこだわりが最も色濃く出た章であるように思われる。そしてその方法やこだわりは民俗的な視点を中世の社会に生かしている点にうかがうことができよう。またその一方で従来の民俗学的な成果を無批判に受け入れるのではなく、慎重に吟味し、再考して乗り越えていく姿勢にも表れている。そのことを本書から読み取ることで、口承文芸の歴史性への大きな示唆を得ることができるのである。

第四章「音とことばの間―呪的音声表現の諸相」は三篇から構成され、声の持つ狭義の意味伝達以外の特性が取り上げられる。「独歌考―ウソとハナウタの初源をめぐる考察」は共同のものと解されやす

い歌が実は単独で歌われるものもあつたことを指摘する。ウソブク行為やワザウタを素材に、人に向かつて成されるものではないという意味で共同ではない歌の呪的な力が確認される(二七七頁)。「はやし」とば―音の呪性とことばの呪性」では歌の生命が歌詞を越えた音の響きの中に息づく(二八八頁)とし、サ音系、ト音系、タ音系のはやしことばの類型を論じた後に、問答の場における繰り返される音声が生と人との言語的交感を可能にするのだという(三〇四頁)。「あいづち―呪的音声表現の一形態」は古代・中世のあいづちの歴史をたどり、その古態は最初に発せられる文言の句頭に特定の音声で冠されると看破し、靈力を担った聖なる音声であつたと主張する(三二六―三二七頁)。あいづちは他者との懸隔を乗り越えて言葉と交わすことを可能にするために必要とされてきたのだとする(同頁)。

ここで論じられているウソ・ハナウタ、囃子詞、あいづちは口承文芸に不可欠のもの、あるいは口承文芸を特徴づけるものと

して馴染み深いものであるが、歌謡史の立場からの果敢なアプローチによって、従来の研究水準が大幅に進展し、ここでの仮説の検証を含む新しい研究上の課題が示されることとなった。評者は口承文芸の身体性が著者の歌謡史研究から問い直されたものと受け止めたい。我々が寄りかかり、

自明のもののように考えてきた囃子や相づちの構造的な特徴や史料に基づく古い姿の提示―それは資料のひろがりをも示す―によって、口承文芸というジャンルそのものが問い直される段階に進みつつあるように思われる。

終章「歌謡の境域―ウタとトナエゴトの間」では両者を「お通し」の諸事例を通して検討する。そしてウタをトナエゴトとともに境界へ、異質なものへと発せられる言葉であるが、それとともに眼に見えないものに働きかけ、それを言葉によって顕在化させるとする(三四二頁)。一方で、トナエゴトが対象へ直接的で強力な指向性の特徴とするのに対してウタの表現は決して対象へ一筋に向かわないという

(三四四―三四五頁)。そして実は「聞き手の不在」という「独歌」的な契機が全ての歌謡に内在する普遍的な特質であるとし、歌謡史の中で「聞き手」の登場が次なる課題であるとする(三四七―三四八頁)。

四 批判と今後の課題

本書はここまで述べてきたように多くの達成と卓見を含む著者の積年の研究の集成である。それを生産的に批判することはたやすいことではないが、あえていくつかの点で疑念を呈しておきたい。

まず、前半の二章の主題かと思われる境界について。境界という視点もしくは解析の座標はいささか使い古されたもののように思われる。移行とか架橋のような両者の差異よりも共通性をあぶりだす概念を想起しないではいられない。もちろん著者にとつてはそうした言い換えや重層性は自明のことであるとかえって反批判されることと思う。そしてかつて盛んに論じられ、援用された境界という概念を問う姿

勢がさらに深化し、境界の形成、境界の言語によるあぶり出しが本書の主題であることを確認する必要があるだろう。

次いで全体を通じてこれも用いられる「たま」「神」「呪的(性)」「聖なるモノ」で著者がとらえようとしているものは何か、あえて具体的に問うてみたい気がする。それは時には「眼に見えないもの、隠されているもの」と表現されたりする。これらに向けて歌謡が、言葉が、発せられるという見解は本書の基礎的かつ重要な部分であるが、やや便利に使い回されてしまった面があるのではないか。この何かを問うことは歌謡史にのみ課せられた問題ではないことを確認しつつ、著者とともにさらなる探求を試みたいと考える。例えば、逆にこうした言葉の投げかける対象として措定される何ものかは、歴史的時間的な流れのなかで超越するものなのだろうか、あるいは、時代と社会とに規定される陰画のごときものなのだろうか。

細かい話題としては呪文「ゲニヤサバ」に論及する箇所は多い(二二〇、二二八、

三〇五〜三〇六、三二〇頁等)。それだけに概要な事例であり、さまざまな時空のなかに漂っているものなのであろうが、これを扱った専門がないことは通読するうちにもどかしく感じられる。今後、著者によって専門が提出されることを期待したくなる資料である。

もちろん、こうした諸課題は本書の価値をいささかでも減じるものではない。ここに記したもどかしさは、著者とともに我々が共有すべき、次なる課題である。そのことを確認しつつ、拙い書評を閉じたいと思う。

五 まとめ―本書の位置

こうした内容と達成とから、本書は歌謡史はもちろん、口承文芸研究における大きな意味を持つ著作ということができるとりわけ、はやしことばやあいづちをとりあげる第四章を中心に、口承文芸の調査・研究で重視されてきた「場」にとどまらず、近現代の諸資料からは意味を追いきれ

ない音とそれに伴うしぐさ、儀礼に関する示唆に満ち満ちている。具体例を挙げれば、道祖神をめぐるウタの問題(一一六頁)、石を引く際の歌謡(一二三頁)、サカムカエ(坂迎)をめぐる資料(二二九頁)などがそれである。

こうした本書で提示された見解や史料をふまえ、我が国の膨大な口承文芸資料を再検討する大きな課題が我々に課せられたといえるだろう。それには身体所作という点、ことばの彩りや社会的な意味、さらには「呪術的な」という語に代表される宗教的な意味などを考えるために、著者の「歌謡学」という方法が魅力的かつ着実にものとして提出された。今後は本書のように対象を広く解き放ち、広大な視点から改めて対象となる文化的諸事象の意味や特質を考えていく姿勢が求められるであろう。そうした研究対象と方法の革新を包含したものととして本書の出現を位置づけたい。

(梶社、二〇一一年九月／本体三〇〇〇円)

(こいけ・じゅんいち／国立歴史民俗博物館)